

召天者記念礼拝（2018年11月4日）

説教者：中村 信哉

わたしとともにパラダイスに

ルカの福音書 23 章 39 - 43 節

はじめに

今日は、召天者記念礼拝です。数年前から 11 月の第一主日に、先に天に召された方々を覚えて礼拝を行っています。始めに、さがみのキリスト教会の関係者で天に召されていった方々を紹介いたします。

－召天者の紹介－

（馬淵聡子姉、山田朝子さん、高橋英子姉、河尾満志さん、矢澤勝美姉、工藤忠道兄）

私たちの教会は今年、矢澤勝美姉と工藤忠道兄の二名の方を天に送りました。しばしの別れを経験して寂しい思いはありますが、聖書の御言葉から天国の希望を与えられたいと思います。

先ほど読んだ聖書の箇所には、イエス様が十字架に架かれた時の十字架上の会話が書かれています。イエス様は、ふたりの犯罪人と一緒に十字架に付けられました。イエス様が真中となり、右と左に犯罪人が十字架に付けられたのです。

1. イエスが死を迎える人に語った言葉

今日の聖書箇所には、イエス様の言葉は一言しか書かれていません。それは 43 節の「**まことに、あなたに言います。あなたは今日、わたしとともにパラダイスにいます**」という言葉です。これは、一緒に十字架に付けられていたふたりの犯罪人のうちのひとりに語られたイエス様の言葉です。この犯罪人は、この数時間後に死を迎えます。その意味で、イエス様のこの言葉は、死を迎える人に対して語られた言葉と言えます。

イエス様の生涯が書かれた四つの福音書を見ると、イエス様が語られた数々の言葉が記録されています。しかし、死を迎える人に対して語られたイエス様の言葉は、おそらく今日の聖書箇所のこの言葉だけではないかと思えます。

イエス様は生涯の中で、多くの病人を癒されました。死人をよみがえらせることさえありました。そのようにしてイエス様は、数々の奇跡を通して、人々を死から遠ざけてくれました。

しかし今日の聖書箇所のふたりの犯罪人に対しては、イエス様は奇跡を通して、彼らを死から遠ざけることはなさいませんでした。「**おまえはキリストではないか。自分とおれたちを救え**」とどんなに言われても、イエス様は彼らを十字架から助け出すようなことはなさいませんでした。ただ、彼らが死を迎えるままにされたのです。

イエス様は、いつでも私たちを癒してくださるとは限りません。時には、私たちが死を迎えるままにされる時もあるのです。私たちは誰でも必ず、いつかは死を迎えなければなりません。その時に私たちが聞くべき言葉が、「あなたは今日、わたしとともにパラダイスにいます」という言葉なのではないでしょうか。あるいは、私たちの愛する人が死を迎える時に、私たちがその人に語りかける言葉があるとしたら、イエス様のこの言葉なのではないでしょうか。

2. パラダイスとは？

「あなたは今日、わたしとともにパラダイスにいます」という言葉は、私たちが死んだ後どうなるのかということを確認に語っている言葉です。死を迎える人が抱く不安の一つは、自分は死んだ後どうなるのかということです。イエス様はここで、犯罪人のひとりに、「あなたは死んだ後、わたしとともにパラダイスにいる」と言われるのです。

では、イエス様がここで言われているパラダイスとは、一体何なのでしょう。新約聖書のある箇所では、「パラダイス」は「天」と言い換えられています(Ⅱコリント 12:2、4)。その意味で、パラダイスとは「天国」であると言えます。

では、「天国」とは何でしょうか。それは第一に、イエス様がおられる所です。私たちの霊魂は、死んだ後、イエス様のもとに行きます。その意味で、私たちが今日覚えている召天者たちの霊魂は、イエス様とともに天国にあると言えます。

天国とは第二に、労苦から解放される所です。ヨハネの黙示録 14 章 13 節には、このようにあります。「**今から後、主にあつて死ぬ死者は幸いである…その人たちは、その労苦から解放たれて安らぐことができる**」。私たちの霊魂は、死んだ後、罪から解放され、苦しみや悲しみから解放されるのです。その意味で、私たちが今日覚えている召天者たちの霊魂は、罪や苦しみや悲しみから解放されて、全き平安に包まれていると言えます。

3. どうしたらパラダイスに行けるのか？

では、どうしたら「パラダイス」または「天国」に行くことができるのでしょうか。今日の聖書箇所に出てくる犯罪人のひとりの姿から、それを学びたいと思います。

イエス様と一緒に十字架に付けられた犯罪人は、ふたりいました。他の福音書を見ると、彼らは「強盗」(マルコ 15:27)であったとあります。しかも彼らはふたりともイエス様を「**ののした**」(マルコ 15:32)とあります。

しかし今日の聖書箇所を見ると、イエス様をののしたのは、ひとりの犯罪人だけです。ここから想像できることは、ふたりの犯罪人は最初、ふたりでイエス様をののしていたのです。しかし途中から、ひとりの犯罪人は十字架上で回心してイエス様を信じるようになったのです。そしてイエス様から、「あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます」と言われるのです。イエス様が十字架に付けられていたのは約 6 時間です。その 6 時

間の中に、ひとりの犯罪人は回心して、イエス様を信じるようになったのです。一体、彼に何が起きたのでしょうか。何が彼を回心させたのでしょうか。

多くの学者は、今日の聖書箇所少し前の 34 節にあるイエス様の十字架上の言葉を、彼が聞いたからではないかと考えます。その言葉は、「**父よ。彼らをお赦してください。彼らは、自分が何をしているのかが分かっていないのです**」という言葉です。彼は、この言葉を聞いた時、回心し、イエス様を信じたのではないかと考えるのです。

彼は、イエス様が神様を「父」と呼んでいる姿を見て、「この方は神の子ではないか」と考えるようになったのではないのでしょうか。

また彼は、41 節の言葉を見ると、イエス様には「悪いことが何も無い」と感じていました。しかしそれにも拘わらず十字架に架かれている姿を見て、この方は自分たちとは違うと感じたのではないのでしょうか。彼は、自分たちが十字架に付けられているのは、「**自分のしたことの報いを受けているのだから当たり前だ**」と考えていました。しかし「悪いことを何もしていない」イエス様が、「父よ。彼らをお赦してください」と祈る姿を見て、この人はもしかたしたら、「自分のしたことの報いを受けている」のではなく、「誰か他の人のしたことの報いを代わりに受けている」のではないかと考えるようになったのではないのでしょうか。

確かに聖書全体は、イエス様の十字架の死は、身代わりの死であったと語ります。神の子であるイエス様は、私たち人間の罪を背負って十字架に架かり、私たちの代わりに神様の裁きを受けて、私たちの罪を償ってくださったのです。そのためイエス様は、「父よ。彼らをお赦してください」と祈られたのです。

犯罪人のひとは、わずか 6 時間の中に、イエス様をののしる者から、イエス様を信じる者となったのです。そしてこのわずか 6 時間の中に、罪を赦され、イエス様とともに「パラダイス」「天国」に行く者となったのです。

この犯罪人のひとりの姿から教えられることは、人はどんなに罪深くて、またどんなに死の間際でも、イエス様を信じるなら、罪を赦され、天国に行くことができるということです。天国は、どんな罪人にも死の間際まで開かれているのです。

おわりに

私たちは、イエス様を信じるなら、どんなに罪深くて、どんなに遅くても、罪を赦され、天国に行くことができます。イエス様を信じる者は、死んだ後のことが明確になり、不安から解放されます。イエス様を信じる者にとって、死は、罪や苦しみや悲しみから解放される時であり、天国への入口となるのです。

私たちが今日覚えている召天者たちは、イエス様を信じて、私たちより先に天国に行かれました。私たちがもしイエス様を信じるなら、私たちもやがて天国に行き、召天者たち

との再会を喜ぶことができるのです。